

「LINKtopos」に参加！

LINKtopos2019 in Kochi スケジュール

1 日目	オリエンテーション ポスターセッション
2 日目	黒潮町・大西町長講演 津波避難タワー見学、避難道 ワークショップ
3 日目	ワークショップ成果発表 地区別LINKtopos 解散

東日本きずなプロジェクト有志四名は、九月三日から五日にかけて行われた「LINKtopos2019 in Kochi」に初参加した。

「LINKtopos(リンクトポス)」とは、「全国公立大学学生大会」のことで、全国の公立大学の学生で組織される「公立大学学生ネットワーク」が主催する。年一回災害支援・防災にとどまらず、地域活動を行っている学生らが全国から集まり、ワークショップ等を通じて研鑽・交流を図るほか、各地域における学生間交流を行っている。

第七回目の今年度は「防災・減災」をテーマに、防災先進自治体とされる高知県黒潮町にて開催された。黒潮町は南海トラフ地震想定において国内最大の津波が襲うと予想され、それをうけて積極的な取組を行っている自治体である。

概要

振返り

一日目、約八時間の移動を経て「幡多青少年の家」に到着した後、ポスターセッションを行った。自らの活動の紹介等を行うと同時に、同様の活動や性質の異なる他団体の発表を聞くことができた。なかでも、本団体と同様に東北で震災学習などの活動をしている団体との意見交換は非常に参考になった。

二日目は、黒潮町の大西町長の講演を聴いた後、高さ二二層もの津波避難タワーに登るなど、実際の避難道を辿った。その後、事前を選んでいったテーマに基づいて三つに分かれ、ワークショップにじっくりと取り組んだ。

最終日は、そのワークショップにて班ごとにまとめた企画案等を発表した。学生ならではの面白いアイデアも見受けられた。午後は「地区別「LINKtopos」という、各地方単位での交流の場を設けようとする企画について話し合った。

全日程を通しては、アイスブレイクや自由時間を含む全日程を通して他大学のさまざまな活動に取り組んでいる学生と交流ができ、刺激となったと感じている。また、本学から参加したメンバーの五名で過ごした時間は非常に濃密であった。今後の活動に活かしていく所存である。

LINKtopos
臨時号

【発行者】
東日本きずな
プロジェクト

参加者 (init.)	学年
H.K.	B3
N.I.	B3
A.T.	B4
H.K.	B4
K.O.	M1
G.S.	職員



2019.11.03-05@ 第15回みやこ祭
(首都大学東京 大学祭)

東北名物笹かまぼこ
津波被害から復活の地酒

東北の魅力を、首都東京で

震災を学び、
東北の魅力
にふれる

東日本
きずな
プロジェクト



東日本きずなプロジェクト



ワークショップ

一班

一班は「防災イベントを立案する」というテーマでワークショップを行った。まずワークショップに先立ち、NPO砂浜美術館の西村優美氏から話題提供者としてお話をいただいた。講話をまとめると、イベントを企画・実施する際には、参加の気軽さ、人と人とのつながりの形成、資金を参加者から調達することによる持続可能性といった点を重視しているという。

続くワークショップでは、企画内容等についてブレインストーミングを行った後、頂いた講話の内容や実現可能性という観点を踏まえつつ、企画内容の絞り込みを行っていった。我々のグループの提案は、各地の大学周辺地域において、住民からその街の「守りたいもの」の写真等を募集し、それらを用いてモザイクアートを制作するというものであった。これは一見すると、この企画と防災の直接的な関係は見えづらいかもしれない。しかし我々としては、自分にとって大切なものについて考えることが、自分が住む街のことを改めて考えるきっかけになり、ひいては防災意識の向上につながると考え、この提案に至った。初めて出会った学生同士によるワークショップであったが「防災とはなにか」という点から深く考え議論することにより、充実した提案が行えたのではないかと感じている。

(H・K)

二班

二班は「災害時の情報を正しくわかりやすく伝える方法を考える」というテーマでワークショップを行った。話題提供者は高知放送・報道制作局長の竹島章紀ゆきの氏である。竹島氏によれば情報の発信者を「信頼度の高低」と「広がり」の速度・範囲の二つの軸で整理すると、マスコミと違って個人のSNSは信頼度が低く時に誤りが含まれる可能性もあり、また一般的にはフォロワー数が多くないために広がりには狭いと言えるが、一方でSNSはマスコミでは行き届かない現場の情報を伝えられるという強みがあるという。この個人のSNSからの発信の信頼度を上げるための方法を考える、というのがワークショップでの眼目であった。まず、①なぜ情報は正しく伝わらないのか②竹島氏の話に関する感想や意見③情報が正しく伝わらないとどうなるのか、についてブレインストーミングを行った。次に①の中から原因を一つ取り上げ、学生ができる対策を挙げ、効果の大きさと実現に要する時間の二軸でアレレンジ型SWOT分析を行った。そしてSNSでの情報発信における信頼度を上げるため、学生にできる企画を提示した。

私たちのグループは災害時に必要な情報を的確に伝えるためのテンプレート・ハッシュタグの作成と、より信頼度を上げるためにハッシュタグの付いたツイートの真偽を確認し手動でリツイートする公式アカウントの作成を提案した。「発表のわかりやすさ・内容の面白さ・効果の大きさ・実現可能性・資料の見やすさ」の五項目・五段階により評価され、一位を頂くことができた。

(A・T)

三班

三班は「大学生を対象とした地域の防災知識を得るための授業内容を考える」というテーマに取り組んだ。このテーマは、実家を離れ一人暮らしをしている大学生が大学周辺に多く住んでおり、地域の防災知識が欠如していることが多いという背景から設定された。

まず初めに、大学生の防災知識欠如はなぜ生じるのかという視点で議論した。私たちの班では「災害を自分手として感じられない」ということに着目し、「防災への興味を持ってもらうために何ができるのか」という視点で進めていくこととした。

次に、大学生に響く内容にするため、どのような授業にやりがいを感じるかという視点で話し合い、自ら考えたり手を動かしたりする授業の方がやりがいを感じるという意見が出された。さらに、身の回りの災害について考えられるようになるため、授業の狙いを「普段から防災という目線で地域を見る力を培う」と定めた。このようにして作った授業案は、フィールドワークを通じたハザードマップ作りをするというものである。具体的には、大学内での避難経路における危険箇所を考えるワークショップや地域のハザードマップと地域住民の声を合わせた新しいハザードマップ作成するワークショップを行う。

(K・O)



フィールドワーク

二日目のフィールドワークでは、まず黒潮町佐賀地区の津波避難タワーに登り、避難フロアにおいて職員の方の説明を伺った。黒潮町内には全部で六基の津波避難タワーが建設されたが、なかでも佐賀地区のこのタワーは全体で二二層もの高さがあり（想定浸水深最大一八メートル）、収容人数約二二〇人という日本最大級の大きさである。階段に加えて、らせん状のスロープが併設されており、かつ各階層の踊り場でそれらが交差するため速やかに登れるように設計されている。地区では、二か月に一回避難訓練をしており、なおかつ夜間・屋内という複数の種類で実施しているとのことであった。避難フロアからは地区全体が見渡せたが、なかでも従来の避難場所であった学校の屋上はかなり下方に認められ、二〇一二年に発表された、いわゆる南海トラフ地震の被害想定を受けて町が大幅な見直しを余儀なくされたことが視覚的に分かり、非常に印象的であった。

その後、実際の避難道を走って体験した。こちらは山に続く避難広場で、普通の石階段であり、少々登るのは疲れたが、個人的には地に足がついている感覚が避難タワーよりなんとなく安心できた。

このような避難タワーや取組などをみると、確かに黒潮町は多くの自治体よりは積極的に対策に励んでいるように思われる。ただ、フィールドワークに先立って行われた町長の講演にもあったが、避難タワーなどのハードが具備されていたとしても、結局のところ問われるのは実際に避難行動に移せる住民をいかにつくりだせるかということだ。災害において「絶対大丈夫」など存在しないなかで、「今後三〇年以内に七〇～八〇%の確率で発生する」などといわれる地震と津波に緩みなく備えることが求められている。



コラム 黒潮町長の講演を聞いて

フィールドワークの前には、黒潮町長である大西勝也氏による講演が行われた。ここではその講演の内容を紹介し、そこから得た筆者の考えを述べる。

黒潮町は東日本大震災後に発表された南海トラフ地震の新被害想定において、最大震度七、最大津波高三四・四メートルに達する時間二分という日本で最も厳しい数値が算出された自治体である。そんな黒潮町の住民からは、防災に対する諦めムードが漂うこともあったという。そこで町長は町職員に対し、消極的な考えや発言を一切禁止するといった旨の訓示を出し、町を挙げて防災に取り組む方針を示した。具体的な取組としては、まず全職員に対しての防災ワークショップを実施し、職員に防災に関する知識を習得させた。その後、町内を一四ある消防団単位で分け、それぞれに五～三十八人の職員を配置し住民向けワークショップや街歩きを行った。それに伴い、全住民の家族構成や避難行動をまとめた個別津波避難カルテや、地区防災計画の作成も行われていった。また、「明るく、楽しく、前向きに」をモットーに、堅苦しくない雰囲気作りによって、住民が気軽に防災に取り組めることを目指しているという。

この黒潮町の取組は、庁内では町長がリーダーシップを発揮し、トップダウンで職員に指示を出しながら、事前に行政が住民に対してきめ細やかな対応を取ることで、被災時には住民が主体的に避難行動を起こせるような施策を講じていると評価できる。

以下は筆者の所感である。前述の通り、黒潮町は「防災先進都市」と言われている。しかし、黒潮町は決して「防災モデル都市」ではなく、どの自治体においても黒潮町の取組を行えば成功するとは言えないのではないのか。例えば黒潮町の人口は高知市の約三％、職員数は高知市の約七％程度であり、首長が職員に与える影響力や職員の負担、住民の生活環境の違い等を鑑みれば、職員の地域担当制は汎用性が高い手法とは言えないだろう。防災に限った話ではないだろうが、自治体の施策を観察する際には、取組だけでなくその背景も観察する必要がある。黒潮町は確かに自分たちの置かれた立場や環境に適応した取組を行っているという評価は、だからといって他自治体よりも先に進んでいるという評価は、スタートが同列でない以上、単純に下せるものではない。「先進」という言葉に惑わされ、冷静に分析する視点を失ってはならない。

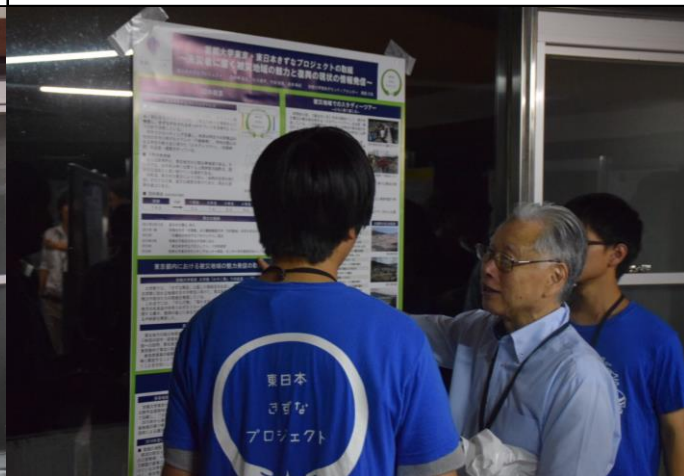
参加者の声

行く前は不安の大きかった今回の派遣であったが、終わってみれば収穫の多い3日間であった。ポスターセッションでは、近畿や九州などの地域にある大学しながら、我々と同じく東北を活動のフィールドとしている団体を知れた。彼らは我々より多くの移動コストを抱えながらも、自分たちの地域と東北を結びつけ、工夫をこらしながら独自の活動を展開していた。我々も「近いからこそできる活動」や「東京にある大学だからこそできる活動」に取り組んでいかなければならない。(H・K)

フィールドワークが特に印象的だった。これまでは東日本大震災の被害を受けた地域を訪れていたため、津波から避難するための高台から見える景色は、復興の景色であった。一方で今回見た景色は、町の人々が大切にしているふるさとそのものだったが、第三者の目線で津波が到達し町が流される様子というのを冷静に想像してしまったことにショックを受けた。町を大切にしていきたいという想いと高い確率で起こる災害の現実との葛藤という新たな視点を得られた瞬間だったように思う。(A・T)

今回のLINKtoposのテーマは防災で、東日本きずなプロジェクトとしては、自分たちの取組とはやや異なっていた。話が合うのか少々心配もしていたが、今回は津波防災が主なターゲットであったので、三陸地域の復興と比較することができた。スロープと階段を併設する津波避難タワーなど、取組として工夫されている点もあったが、想定している被災状況について疑問に思う点もいくつかあり、考えを深めるきっかけになった。現状をただ鵜呑みにするのではなく、批判的に捉えるからこそ分かることもあるということを改めて痛感させられた。(K・O)

黒潮町長の講演のなかで、防災を肩肘張って取り組むものではなく、「明るく、楽しく、前向きに」行うものとして意識づけをするという話があった。奇しくも、当団体の設立当初からの方針は「明るく、楽しく、役に立つ」というものであり、やはり活動や取組を継続していくにあたっては重要なことであろうと再確認した。継続して同じところに通い続ける団体が減っていく時流にあり、じきに所謂「節目の10年」を迎える時分にあって、我々がこれからも今までの活動を続けていくとするならば必ず大事にしていきたいと思うことの一つである。(N・I)



「防災意識を育む」という言葉に違和感を感じるのは僕だけでしょうか。人間は本来危機意識や危険に対して回避する能力をもっているはずですが、しかし、万が一のために行動するのは億劫ですね。今日これから災害が起きると、真剣に考えることは難しいですね。そんな壁が、人間の奥底にある防災意識を覆っているのだと思います。

今回のLINKtopos2019では、全国の公立大学の学生が防災・減災について話し合いました。住んでいる街も日頃の行なっている活動も違う中、自分たちだからこそ出せる答えを模索しました。それぞれの考えを認め合うだけでは答えに近付きません。時には意見がぶつかり合います。少し感情的になると、それぞれの人間性が表面に出てきます。壁が少し剥がれてきました。

感情的になれるということは、すでにその人の奥に防災意識がある証拠です。

与えられた防災知識は「だれかの防災」です。少し感情的になりながら自分の防災を引きずり出した、そんな三日間でした。(G・S)



東日本きずなプロジェクト

連絡先

tmu.kzn.east.japan@gmail.com

twitter : @kzn_pj

皆様のご意見・ご感想等、
お待ちしております。

〈編集後記〉きずな新聞は今回で(実質)第2号目です。経験したこと、学んだことを限られた紙幅のなかで言語化することには難しさがありますが、アウトプットするプロセス自体に意義がありますし、同時にある種の活動のアーカイヴとして団体内に残していけることが今後意味をもってくるのではと考えます。今後も不定期にでも発行していきたいと思っています。